

子どものかかわりを増やす授業のユニバーサルデザイン

高知大学大学院 総合人間自然科学研究科 教育学専攻特別支援教育コース 是永研究室 是永かな子
香美市立香北中学校 教諭 中村小百合

1 はじめに

今から 20～30 年前の学校では、伝統的な一斉授業のやり方でニーズが満たされている子どもたちが多かった。当時でも、学習面に困難があり授業についていけない子や学習進度が遅くて物足りなさを感じている子どもたちもいたが、その数は、現在より少なかった。故に、従来の授業方法でニーズが満たされる子どもたちの層が以前より少なくなっている¹。これは、現場の先生方の実感とも合致することではないだろうか。

学校教育法等が改正され、小・中学校等においても特別支援教育を推進することが法律上明確に規定された（平成 19 年 4 月施行）²。現在、小・中学校において通常の学級に在籍する LD、ADHD、高機能自閉症等の児童生徒に対する指導及び支援が喫緊の課題となっており「特別支援教育」においては、特殊教育の対象となっている幼児児童生徒に加え、これらの児童生徒に対しても適切な指導及び必要な支援を行うものである³。これまでは、学級を構成する児童生徒の一人として存在し、日常は他の子どもとあまり変わったところがない故に、本人のやる気や自覚不足などで済まされ、「ちゃんと聞いていない」「もっとしっかりしなさい」などと言葉で叱咤激励が繰り返されてきたことは否めない。今回の法改正により、一人ひとりに合わせた授業や教材の工夫が求められていることが明示された。

発達障害等のある子どもの学びの場や生活における適切な指導、必要な支援に際して、教員は難しさを感じている。これは子どもたちの努力不足や保護者のしつけが原因ではなく、障害の特性に起因するものととらえることが大切である。そのため、発達障害等のある子どもへの指導や支援に際しては、幼児期から一人ひとりの特性に応じて行うことが必要となる。また、学校においては、子どもの「分かる」を追究し、誰にとっても分かりやすい授業づくりを行うことが求められている。このような、発達障害等の特性を踏まえた支援の方法は、障害のない子どもたちにとっても有効な指導の要素をたくさん含んでいる。ユニバーサルデザインの視点に基づき授業づくりを徹底することは、すべての児童生徒にとっても分かりやすい授業となり、小学校や中学校などの全体の学力向上にもつながる⁴。子どもたちは、「分からないことが分かるようになりたい」「できないことができるようになりたい」「あらゆることを知りたい」と、思っている。ユニバーサルデザインの視点に基づいた授業づくりにより、児童生徒一人ひとりの学習意欲の向上とともに学力向上が導かれると推測する。

研究対象とする A 中学校は、本年度 1 月末現在では、30 日以上欠席者数が全国平均を大きく超えている状況にある。よって中学校における不登校問題の解決においても、教員と子ども、また、子ども間の「かかわりを増やす」授業が課題とされる。

2 研究の目的

本研究では、中学校の実践に着目し、「ユニバーサルデザインの授業づくり」について、アンケートや授業観察から現状を把握し、子どもの「わかる」「できる」授業を具体化することを目指す。また、特別に支援が必要な子どもも含めて、授業改革を推進していくための方法として、特に子どものかかわりを増やす授業のユニバーサルデザインについて考察することを目的とする。

3 研究内容

(1) 研究の方法

ア 授業観察と支援

4月下旬から1学期間は授業観察を中心に週1回行い、2学期からは授業観察と支援を週1～2回学習支援員として1・2年生の授業を中心に入った。

イ SDQ アンケートの実施

SDQ アンケートとは、その子どもの持つ強みと困難さを掴む手段である。質問紙は、教師用・本人用・保護者用があり、今回は三者にアンケートを行った。多動性・情緒面・行動面・仲間関係・向社会性の5つの項目のうち、向社会性のみ点数が高いほどよいとされ、他の4項目は、点数が低い方がよいとされる。本人と教師の困り感とのズレも提示できることから、予防的介入が期待できる。

SDQ アンケートの対象者は、中学校1～3年生の子ども・担任・保護者であった。実施時期は、5月と11月の2回であった。

ウ ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト

東京都日野市の公立小中学校教員・教育委員会 で作成した『通常学級での特別支援教育のスタンダード』や高知県教育委員会作成の『「わかる」「できる」授業づくりガイドブック』を参考にアンケートを作成した。アンケート対象者は、A中学校1～3年生の生徒である。6月と12月の計2回実施した(10項目)。

エ ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりチェックリスト

東京都日野市の公立小中学校教員・教育委員会 で作成した『通常学級での特別支援教育のスタンダード』や高知県教育委員会作成の『「わかる」「できる」授業づくりガイドブック』を参考にアンケートを作成した。アンケート対象者は、A中教員11名である。6月と12月の計2回実施した(20項目)。

オ 授業参観者評価アンケート

東京都日野市の公立小中学校教員・教育委員会 で作成した『通常学級での特別支援教育のスタンダード』や高知県教育委員会作成の『「わかる」「できる」授業づくりガイドブック』を参考にアンケートを作成した。対象者は、A中校長・教頭・大学院生の3名である。6月と12月の計2回実施した(10項目)。

アンケートをとることにより、教員個人の変化を項目別にみることができる。

カ 行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法(10月～11月)

SDQ アンケートの結果や一学期の授業観察から、気になる子どもの「行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法」を全校生徒のうち、支援が必要な生徒も含め、気になる生徒26名分を作成した。

次に、「行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法」を授業時や授業後にチェックしてもらい、全体での指導と個への指導が表をチェックすることで意識化されることを目的として授業改善に活用した取り組みについて考察を行った。対象者は、A中学校教員(11名)である。

(2) 夏休みまでの実践

第一に、A中学校の現状と課題を検討し、第二に、SDQ アンケートや生徒アンケート、教員アンケート等から現れてきた結果から課題を探り、考察を行った。

結果として、SDQ アンケートにおいて、仲間関係に関して、教員の困難性が高い学年も見られたが、特に生徒本人や保護者の困難性が高いことが示され、ソーシャルスキルトレーニング(以下、SST)やアサーション、構成的エンカウンターと授業のユニバーサルデザインを融合させて、意識的にかかわりを増やす授業づくりが必要であると考察した。1つの小学校から進学してくる子どもたちであるので、固定的な人間関係ゆえの困り感も想定される。仲間を大切にしたり、かかわり合いを持ったりしながら授業や生活ができるように工夫すること、また、そのような学校生活の情報をお便りや参観授業を通じて保護者にも発信できるようにしていくことが必要であ

ると考察した。

生徒アンケート、教員アンケートからは、机間指導の時に、目視確認のみならず、ノートに○付けをしたり、シールを貼るなどの評価や出来栄を短い言葉で表現してまわるなどの個別の評価活動、つまり教員から子どもへのかかわりが必要だと考察した。

また、個人名を入れたりしながら、ささやくような声の大きさにアドバイスを行い、生徒に一人でも多く声かけをするつもりで机間指導を行うことも重要であろう。T2 も積極的に声かけや評価に加わり、机間指導で早めに声かけした方が良い生徒や繰り返し支援が必要な生徒などのところを回るようにするなどの意識化も有効であった。

以下に参考として、2年のSDQの結果を示す。

表1 2年SDQの結果 (H: High Need, S: Some Need, L: Low Need)

	TDS 総合困難得点	行為	多動・ 不注意	情緒	仲間	向社会性 高いほどよい
生徒 N:32名 (100%)	H: 3 S: 1 L: 28	H: 0 S: 3 L: 29	H: 2 S: 2 L: 28	H: 6 S: 3 L: 23	H: 3 S: 0 L: 29	H: 11 S: 10 L: 11
教員 N:32名 (100%)	H: 0 S: 3 L: 29	H: 0 S: 2 L: 30	H: 1 S: 1 L: 30	H: 0 S: 0 L: 32	H: 2 S: 0 L: 30	H: 12 S: 3 L: 17
保護者 N:32名 (100%)	H: 3 S: 4 L: 25	H: 2 S: 0 L: 30	H: 3 S: 2 L: 27	H: 1 S: 6 L: 25	H: 4 S: 3 L: 25	H: 12 S: 3 L: 17

以上を踏まえて、2014年5月時点のSDQの結果を踏まえた考察は以下である。

情緒面においては、教員0人と生徒・保護者がそれぞれ8~9人で、ズレが出ていた項目である。声かけや、賞賛を行うなどの取り組みを授業や生活を通じて意識して行い、自己肯定感の向上を目指す必要がある。仲間関係においては、保護者において、生徒や教員の数値の倍以上の数を占めていた項目である。小学校での人間関係から成長している子どもたちについて、仲間を大切にしたり、かかわり合いを持ったりしながら授業や生活ができていけることを便りや参観授業を通じて発信できるようにしていくことが良いだろう。また、授業での出来事を家庭で話したくなるような授業を生徒と作り上げていくことが、保護者とつながることにもなるのではないかと考察する。

向社会性においては、S・Hランクの生徒の割合が、教員・保護者で50%、生徒においては2/3の割合を示し、子どもの社会性を向上させる取り組みが望まれる。社会性のスキルアップを図る授業を意識して授業の中に取り入れ、生徒の心の開放と学習を身につけるための受け皿づくりを行う。

保護者においては、生徒の内4名の保護者は、トータルスコアの数値が高く、子育てでの不安感が少し高いようである。折を見て、話す機会をもったり、何気ない会話を継続していったりする必要があるようである。

生徒の内4名は、トータルでの数値も高く、声かけや時折、話を聞く機会を持つなど注意して行う必要があるようである。特に、1名の生徒は、学習上の困難さがあり、きめ細やかな指導や声かけを必要とする。T2の教員からも積極的なかかわりを行い生徒に安心感や自己肯定感を与えたいところである。

(3) 9月および10月のSDQに基づく個別の行動の背景の検討

特に課題が考えられる、1年生9名、2年生8名、3年生7名の全学年合計26名分について、「行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法」を作成した。それをもとに授業時や授業後にチェックしてもらい、全体での指導と個への指導が表をチェックすることで意識化されることを目的として授業改善に活用した。

以下に参考として、支援方法の例を示す。

表2 個別の行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法(例)

A:前提条件・背景	B: 行動・現状	C:支援方法 (予防的、対処療法的)	評価
・具体的な表現でない指示は、本人に伝わりにくい。	・ボーっとしている。	・説明を簡潔、具体的に行う。	
		・机間指導でアドバイスを具体的にしたり、評価を入れる。	
		・関わりをもてる生徒がそばにいる	
		・ペア学習やグループ学習を入れ、コミュニケーションをとる機会を作る。	
・板書と手元を見て書くことを苦手としている。	・板書を書き写すのが遅い。	・板書量を減らす。	
		・(できれば板書計画のプリント化)	

このように、「困ったことが起きてもそのまま何もしない」「ボーっとしている」「分からないことがあっても着席したまま、じっとしている」「登校できない」等、主体的なかわりを起こすことができない子どもの困っている姿が顕在化した。

また、「行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法」を作成して、実行したことによって、「行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法」に書かれてあることを細かくチェックして回り、これまでより机間指導時の動きが活発になるとともに、生徒に対する声かけも多くなったというような教員の変化が見られた。かわりも増え、声かけの仕方や、支援のために回る順番など示して授業に臨んでもらい、生徒に対して教員から話しかける回数が増え、子どもから笑顔が返ってくるようにまでなった。

(4) 2学期の授業実践とその取り組み (かわりのある授業)

第一に授業実践を通じて、ユニバーサルデザインの工夫を考察した。第二にかわりのある授業として、ユニバーサルデザインの工夫やかわりを意識した授業について検討した。

結果として、ペア活動やグループ活動の活用、一人ひとりに教員が評価を行うこと、「授業では人の意見を聞くことを大切にする」ことの意識化、机間指導を増やすこと、教科リーダーを育成することなどのかわりの形成が行われていた。授業のユニバーサルデザインとの関連では、活動の工夫として、4人グループの学習班で活動する時に、なかなか関われない場合、役割分担を示し、活動をさせる。または、生徒同士が簡単に話す場面をつくり、学習内容に取り組みせるなどを行った。

また、「子ども自身の(教材に対してもしくは授業に参加するための)かわり」が困難な子どもに対しては、失敗をさせないよう声かけや評価を入れる指導を、全教員が連携して集中的に支援した。

以下に2週間行った指導内容を示す。

このように、子どもたちが教室や授業に安心していられるには、周りの仲間や教員に認められているという感覚が持てることが大切な要素となる。一日の中で、学校での授業時間が占める割合は大きい。ユニバーサルデザインを活用しつつ、SDQ アンケートの結果を踏まえた意図的な指導

	二人に共通した指導	個に合わせた指導のチェックポイント
生徒Z	<ul style="list-style-type: none"> ・全教員で切れ目のない連携した指導 ・2週間に渡って、チェック表に教員が状態を指導→記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・机上の整理整頓が自分でできていたか ・机上の整理整頓を教員が手伝ったか ・次の授業準備を一緒に行ったか ・授業が始まる前から準備ができ、机上は整理整頓できていたか ・帰りの会の中で連絡帳が書けていたか ・寮で、明日の準備を本人と一緒にしたか ・寮で、歯磨きを（一緒に）確認したか
生徒Y		<ul style="list-style-type: none"> ・眼鏡を持ってきていたか ・眼鏡をかけていたか ・ノートをとり、真面目に授業が受けられたか ・うつ伏せになったか ・授業中にトイレに行ったか

が現在のA中学校には求められていた。

- (5) 生徒評価アンケート・教員評価アンケート・観察者アンケート・SDQアンケートの結果一例として2年国語を示す。

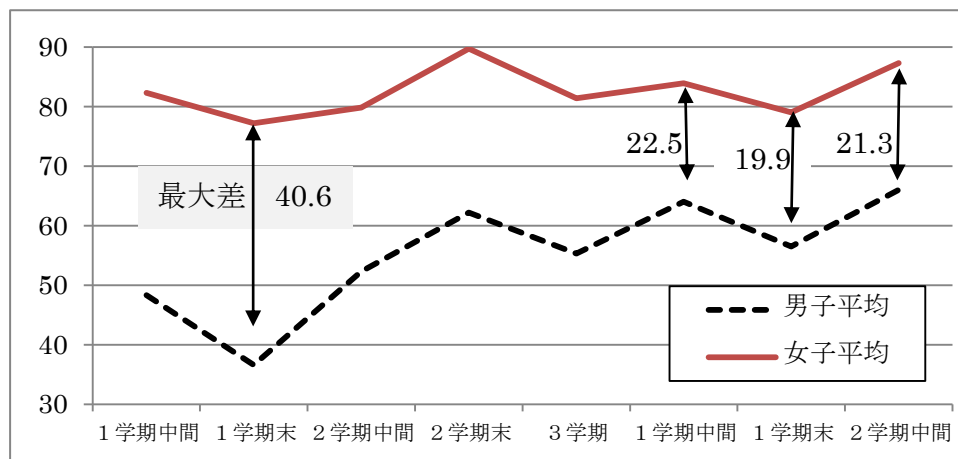


図1 国語定期テスト平均点の推移(点)

図1に示されるように1年から2年までの定期テストの平均点を見ると、一番男女差が大きかった1年生1学期 期末テストでは、男子36.6点、女子77.2点と、男女差が40.6点であった。

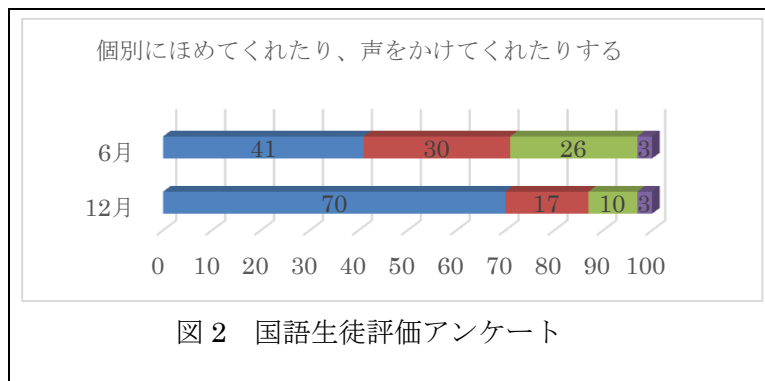


図2 国語生徒評価アンケート

しかし、2年生になってからは、男女差は20点差程度で推移している。また、T2にも国語科の教員が入り、T1と同様、生徒への声かけやアドバイスにあたっていた。「行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法」を活用し、チェックされたものを見ても、生徒たちに対する細やかな対応や授業作り

においてもT1・2の連携がなされ、授業中に気になる生徒のところにも、声かけを行い、○つけやアドバイスに回り、一人の生徒に複数回の声かけがされていた。図1にその結果が示されている。

また、観察者アンケートの6月と12月の評価を比較してみると、1年数学においては、1項目を除く、9項目で評価が向上していた。この理由を考察してみると、ユニバーサルデザインに基づいた授業づくりが進められたことと、「行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法」を活用し、学級集団と個別に対応していく上で手掛かりができ、教員の机間指導時での動きがよくなったり、多くの生徒と会話を持つようになったことが挙げられる。何より、机間指導時に教員の表情が少し和み、生徒と笑顔で対話する場面も見られるようになったことは大きな成果である。

以下にSDQの2年生の2回目の結果を示す。

	TDS 総合困難得点		行為		多動・不注意		情緒		仲間		向社会性 高いほどよい	
	H	S	H	S	H	S	H	S	H	S	H	S
生徒 N:31 (97%)	6↑	2↑	2↑	1↓	2	4↓	5↑	15↑				
	2↑	1↓	2	3	3	3↑	3↓					
	23↓	28	28	25↑	23↓	11	13↑					
教員 N:32 (100%)	1↑	0	0↓	0	1↓	7↓						
	0↓	1↑	0↓	1↑	2↑	3	6↑					
	31↑	31↑	32↑	32↓	29↓	17	19↑					
保護者 N:31 (97%)	3	2	2	2	4	4↓						
	1↓	0	0	2	3	3	11↑					
	27↑	28	29	17	25	17	16↓					

情緒面においては、S・Hランクが、教員1と生徒7でズレが生じていた。それを受けて声がけや、賞賛を行うなどの取り組みを授業や生活を通じて意識して行い、自己肯定感の向上を目指した。また、休み時間などに何気ない会話をしたり、放課後に話をしたりする機会をもつことも大切であることを共通認識した。これまでの3人のみならず新たに5人が精神面での不安傾向を示したので、一人でも多くの生徒と話すつもりで、校内巡視を行うことを提案した。

仲間関係は、1回目調査の時には、保護者の数値が他より高い傾向を示したが、今回の調査では、生徒の数値も増加しており、生徒の表情や態度など観察をしていく必要がある。授業をはじめ、部活動での人間関係など、生徒とかかわりを持ちながら不安解消の手立てを具体化する。

SDQアンケートの2回目の結果からも、やはり向社会性に弱さが見られ、2回目のSDQアンケート時に、新たにHigh NeedまたはSome Needを示した一年生5人、二年生10人、三年生2人の計17人に聞き取り調査を行った。そのうち、5人から、アンケート当時の困り感を聞くことができた。

生徒Bは、SDQアンケートの結果が、向社会性において下がったことを自分中心の考えになることがあるからではないかを見ていた。また、生徒Cは、思っていることがあっても言えず、我慢してしまうところがある。その時に嫌な気持ちになることはあるが、どう相手に返せばよいのか分からず、謝ってしまう。そこで、どう相手に返せばいいのか練習をし、自分の気持ちを伝え、分からないことは、相手と相談する方法を一緒に考えた。生徒Dは、部活動の主将である。自分よりもっと気もついて話すことができる人がいて、こんな自分が前に立っていいのかと思う。人前で、うまく話せるようになるにはどうすればよいのかと困っていた。方策として、例えば、昨日のことを思い出して、自分の気が付いていることを箇条書きでいいので、書き出してみる。それに番号を振り、話す順番をつけてみる。そうすると、あとは、文章になっていくので、「書く」努力をし、あとは話す練習を自分ですれば話せるようになることを伝えた。練習したうえで、心配な時には、顧問にリハーサルを付

き合ってもらふなどの方法が取れることも本人や顧問に伝えた。

4 まとめ

A 中学校実践による成果と課題としては以下が挙げられる。第一に、T1 のみならず T2 も積極的に個別支援に加わることで、行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法も活用することは一定有効であろう。第二に、SDQ アンケート結果からも、向社会性に弱さが示された。向社会性にかかわる活動を授業中短時間で組み込んだり、特別活動・道徳などの授業において意図的に構成したりすることが必要である。第三に、継続的な授業改善である。生徒の「できない」「分からない」を生徒の問題と捉えず、教員の問題として捉えて具体的な工夫につなげることである。

中学生になると、学習の進捗が早くなり、課題の量も多くなる。LD、ADHD、高機能自閉症などの発達障害がある生徒は、本来もっている能力を発揮できないだけでなく、学習の習得が困難になってきて、周囲の生徒との学力の差が開いてしまうことになる。

学校では、このような生徒の様子から「勉強ができない子ども」「きちんと聞いてないからわからない子」「中学生としての自覚が足りない子」「家庭学習が不足している子」と思われがちである。また、「できないことがあるとすぐ逃げ出す」「忘れ物や提出物の期限が守れない」といった、行動上の問題だけで捉えてしまうこともある。「もっとしっかりしなさい」「よく考えなさい」「何をしたらよいか分かるでしょう」という叱責を多く受けるが、言葉だけの指導ではなかなか改善するのは難しい。このように長年、学習に苦慮していると、中学生の時期には「やりたくない」「どうせやってもできない」「面倒くさい」というひたすら消極的で拒否的な気持ちになってしまう。

そこで生かしていきたいベースは、ユニバーサルデザインを根底に置いた学級づくりや授業づくりである。

人間関係や授業の中でしんどい思いをする子どもたちがゼロに限りなく近くなり、「わかる」「できる」ことにより、自分に自信が持てる子に育ってもらいたいと考えるのは保護者の願いでもあろう。

今、教師たちに求められているものは、子どもたちの姿を捉え、その実態からどう行動を起こし、柔軟に自己を変化させ、目の前の子どもたちに生かしていけるかである。

ユニバーサルデザインを生かした授業づくりのうち、A 中学校の課題であるかかわりを生かした授業づくりや評価の工夫に焦点化し、授業づくりに参加させてもらった。生徒の実態からどう授業づくりをしていこうかと検討している時にある教員がこう言った。「このユニバーサルデザインの方法は具体的で、分かり易いですね。今まで、人に言われてもどういうことか分かりにくかったけど、この方法は、よう分かる」と。

この言葉を聞き、ユニバーサルデザインを学校現場で授業に生かし、生徒に「分かる」「できる」を実感させ、自信をつけさせていくということは、やはり、どの子にも分かる授業づくりが成されていくことであり、そのような活動を継続することにより、教員は自信を持って授業に臨めるようになり、ひいては、教員の資質向上に繋がることを実感した。

<参考文献>

- 1 高槻市立五領小学校著 花熊暁編著 (2011) 『通常の学級で行う特別支援教育①小学校 ユニバーサルデザインの授業づくり・学級づくり』明治図書出版, p. 9.
- 2 文部科学省 特別支援教育について 学校教育法等の一部を改正する法律の施行に伴う文部科学省関係告示整備に関する告示 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main.htm
- 3 文部科学省、第2章 特別支援教育の理念と基本的な考え方 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05120801/004.htm
- 4 月森久江編集 (2006) 『教室でできる特別支援教育のアイデア 中学校編』図書文化, pp.11-12.